

革命から自由へ

——イランにおける市民社会とミドルクラスの台頭

日程：2007年10月21日(土)

場所：国士舘大学世田谷校舎 中央図書館 AV ホール

ゾレ・バヤトリズィ (カナダ セントメリーズ大学社会学・犯罪学部)

モハマド・ハタミ元大統領によって推進された政治改革に呼応する形で、1990年代のイランの出版メディア業界では「市民社会」言説が盛んに唱えられるようになった。ハタミ氏の改革による民主的なアイディアの交換領域は、「公共圏」の概念に影響されたものだった。イランにおける「市民社会」という概念は、二つの歴史的経緯に起因する。ひとつは、イランの市民社会運動が近代西洋との長期間の接触であり、もうひとつは1990年代はじめに公共の場や政治の舞台に都市中産階級たちが介入してきたという事実である。

まず、イランの「市民社会」が政治改革の一端としてどのようにメディアによって言説化され、意味付けされてきているかを吟味してみたい。

市民社会化の運動は西洋の近代をイラン社会のあるべき姿に取り入れるという、イランがこれまでずっと試みてきた近代西洋への接近の新たな段階だったと考えられる。19世紀初頭以来、西洋はイランのリーダーたちにとって文化的・文明的な「他者」として捉えられ、国家・共同体としてのあり方、変革の対象として相対化されてきた。19世紀はじめにアッバス・ミルザ将軍がロシアに臨んで敗れた際、「イラン軍が、わずかな数のヨーロッパ軍にやぶれた要因はいったい何なのか」と問いかけた。この発言は、イランのエリートの中で繰り返し反響を呼んだ。これより200年あとの1990年代、所謂「洋学」を開拓したインテリ層のなかにハタミ前大統領がいた。その選挙演説の一部として用いた「宗教的市民社会」というビジョンは、社会的、道徳的、政治的な秩序を構築して上でイスラムと西洋的なものの見方を融合する方向性を打ち出したものであった。

これまでもイラン近代史を特徴づける転機があったが、イラン人のアイデンティティを西洋との対比の中で定義づけていこうとする努力は、1979年の革命に最も著しく表れている。この革命は、憲法、議会、選挙制度といった西洋的な社会機関やアイディアを擁護し、取り入れた。

市民社会運動には、伝統的な世界観と近代的な世界観を特徴づける論議があり、その中に聖域と冒涇の領域区分、人間的宿命とその人為的決定、信仰と自由、私有圏と公共圏、あるいは多様性の尊重といった問題が含まれている。ここでは宗教は特に大切なテーマとなったが、市民社会に関する言説は宗教と世俗性について論じないわけにいかず、ハタミ氏は宗教の役割を定義しなおすことで、それまで公共的生活圏や政治的領域に与えてきた宗教の影響に制限を加えた。こうしたハタミ氏の公共圏及び市民社会の強化政策は、公共的にも私的にも対宗教的な市民の自主性あるいは自治能力と直結した複雑な問題に触れてきた。このプロセスには、出版メディアが多大な役割を果たした。つまり、宗教の神聖性を以って不可侵な聖域を再定義し、それを市民的で可変的な領域から区別するために、言論の自由をもと

めたのだった。

宗教の役割を再定義することで宗教を私的な領域に制限しようという試みは、例えば「ヒジャブ」というドレスコードの公的な義務づけに関わる議論にも見出せる、特に女性達が反発を見せたこの制度についてのネシャット新聞で交わされた議論は、政教分離や公私の区別、宗教的は法制度の限界、あるいは宗教論理と民主主義論理の矛盾といった、より一般的な問題にまで発展した。民主的な論理の支持者は、宗教上及び道德上の罪と犯罪を識別すべきだと唱えた。こういったことが、ハタミ氏当選後のメディア界で、主に知識層を主体に、自由に議論されてきた。宗教だけでなく、言論の自由や政府の分離なども論点として展開されたが、それらの議論に関わったのが宗教的及び世俗的な教育を受けた聖職者が中心だったことを述べておきたい。

第二の論点は、市民社会の言説がいかように市民の間に浸透していったかという問題であり、それは近代西洋文化との接触だけでなく、若者と女性に代表される都市の新興中産階級層の嗜好にも要因があると考えられる。これは、ハバーマスがいうブルジョワの公共圏の萌芽期に西欧諸国で表れたものと類似していた。市民社会議論の突発的な流行は、メディアのなかに強固な立場を確立し、90年代後半に政治的に影響力をもつことになった。この少し前より迎えていた社会経済の著しい変革期は、産業や教育の分野まで影響を及ぼしていた。特に教育面は、都市化され高い教育を施された新しい階級を算出するという結果を出した。識字率もあがり、学生の数も上昇した。こういった層は都市部と地方市街地に顕著で、とくに女性の社会進出は注目に値する。この新世代は、はびこっていた自己犠牲の文化を離脱し、物質的に豊かな生活という全世界的なライフスタイルに傾倒するという特徴があった。これは上部の中産階級に顕著だった現象だが、「腐敗的」と捉えられ、大衆化と商品化に関わる各種のシンボルを求め、利用しながら国家に対抗していると指摘されている部分もあった。公式の宗教教義は、新しい世代内では不相応であると受け取られ、メディアはこうした不安を煽ることで発展を遂げた。自由を求めるということには、社会的批判だけでなく、自らのライフスタイルを選ぶという自由も含まれている。彼らにとってこれら「自由の問題」はインフレや経済停滞といった問題よりも大切なものとして扱われることもあった。

こういった改革はしかし、ある層、とくに下級層を多く作り出す結果をもたらした。非雇用率は大幅に上昇し、インフレが起こったが、これに関する議論やそれに関して起こった暴動や事件などは、新世代人口が主なターゲットだったメディアでは報道されなかった面もあった。非雇用者やインフレに悩まされる市民の大多数から不満の声があがるようになる。利益の再分配を普及させ、自由論を淘汰した新しい大統領を選んだのは、彼らであった。

ここまで、イランは自己を対比させながら周辺の世界と適合してきたことを述べた。市民運動が減少してきたことを、こういった動きの終焉と見なしてはいけない。イランは変化と改革を推進し続ける国である。外界からの圧力により、改革のおおきな流れは存続していくであろう。